

「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」  
関連講演会「昔話が語る天体」

平成 19 年 8 月 28 日  
講師：小澤 俊夫

**人間が天体に持つイメージ**

こんにちは。ご紹介いただいた小澤俊夫です。

今日のテーマの星、月、太陽は、昔話の中では、あまり問題になりませんでした。僕も、それを真正面から取り上げてお話しするのは、今日が初めてです。というのは、星、月、太陽を扱おうとすると、たいてい、神話学になってしまいます。あるいは、民族宗教学の方の研究になります。「昔ばなしが語る天体」という形ではあまりやられてないし、僕自身もやってきませんでした。今回、国際子ども図書館の企画で、天体に関連した話ということで課題を与えられ、やってみたらとても面白かったというわけです。

最初に、いくつか基本的なことをお話しておく、天体、月、星、太陽、それから、空全体というのは、僕らの一生の間、常に毎日、いつときも切れることなく生活に関わっています。ですから、僕たちは天体に対していろいろな思いで付き合っています。悲しい時には悲しい思いで月を見るだろうし、うれしい時にはうれしい思いで月を見ます。つまりそこに、天体と天体を見ている人間との間で、いわば情緒的な交流があるのです。普段生活している中にあるわけです。同じ星を見るのも、うれしい思いで見ると悲しい思いで見るとでは全然違います。そういう人間が天体に持つある一種の感情やイメージ、そういうものが昔話の中に出てきます。それが面白いと思いました。今日は、お話をしていきながら、それを指摘していこうと思います。

面白いことに昔話の中で、月や星や太陽が登場人物として現れて何かをする、たとえば、お月様が地上を歩いていって云々という話は、ないことはないのですが、あまり多くありません。それよりも、人間の方が、星や月に対して持つ

ているある種のイメージが、ちらっと話の中に出てくるという感じです。それで話の中での月、星、太陽の印象が強いのだと思います。それは、具体的に、あちこちに現れてきます。たとえば、月をめぐって、星をめぐって、それが登場人物として行動してストーリーが展開していくという話も、民族によってはあるでしょうが、日本の場合は極めて少ないということが、だんだんわかってきました。

**星の昔話—「七つ星」「星砂の浜」「おにんばの話」「星の銀貨」**

まず、今日は星からお話していこうと思います。星、月、太陽の順番です。先ほど国際子ども図書館の展示会のポスターを見たら、逆になっていました。太陽からはじまっていました。でも、やはり小さい方から大きい方へお話ししようと思います。なぜかというと、太陽の方が圧倒的に力が強いからです。お話の中でもそうです。ですから、太陽は最後にお話します。

星は、僕たちの生活の中で始終見えています。ですから星に対しては実にいろいろな思いを持っているように思えます。面白いことに神話学の方では、逆に星はあまり問題になりません。星はむしろ天体（星座）として、ギリシャ以来の星座の読み方という点では、大変話題になりますが、月や太陽のように神話学の中で、登場人物として、あるいは行動するものとして話題になることはあまりありません。ところが逆に、昔ばなしの中では、星は、大変重要な役割をしています。最初に、沖縄のお話を聞いてもらおうと思います。石垣島には素晴らしい星のお話がいくつもあります。石垣島の山は一番高くても高さが 280 メートルぐらいしかありません。けれど、夜中にそこへ連れて行ってもらったことがあるのですが、見上げると空一面が全部星です。本当に星が溢れて落ちてきそうでした。東京で見る星とは桁違いの鮮やかな星でした。そういう自然の環境が影響しているのだと思いますが、石垣島のお話の中にはいい星のお話があります。今日はこのお話を、あらすじだけ説明するのは面白くないので、お話を実際に聞

いていただこうと思います。というのは、星は、登場人物として長く出てくるのではなく、お話の流れの中の大事なところで、ぱっと出てくるだけです。そのことを、僕は今日の講演中ずっと申し上げると思います。『こびとの贈り物』というグリムのお話でもそうです。ここでは星ではなくて月明りですが、ずっとは出てこないで、ぱっと出てくる、しかもそれは非常に大事な点だということが特徴です。まずは、石垣島の「七つ星」というお話を聞いていただきます。出典は、『おきなわ八重山昔ばなし』（八重山昔ばなしセミナー再話作品集第二集 2003）という昔話集の中にあります。

先ほど紹介していただきましたが、僕は「昔ばなし大学」というものを、全国でやっています。今年で 15 年目になります。そこでは、昔話とはどういうものかを、まず勉強してもらい、その先は、自分で昔話を再話できるように、つまり、土地言葉を共通語に直したり、あるいは、土地言葉を少し弱めて、子どもにわかりやすいようにしたりします。そういう勉強もしています。再話コースは、全国で 9 か所、その上の研究会は 22 か所で行なわれています。石垣島でも、10 年来行なっているグループがあります。この『八重山昔ばなし』は、僕が指導して再話した昔ばなしの作品集です。その中から「七つ星」というお話を聞いてください。

・・・(朗読)・・・

このように、星が登場人物となって出てくるお話は、わりと少ないです。最後のところで、北斗七星のふたつ目の星に小さい星がくっついているという現状説明があります。こういう自然現象を語る昔話の場合、日本だけではなく、現状がなぜそうなったかという説明をする話が多いです。こういうお話を僕たちは由来譚と呼んでいます。何かの由来を述べる話です。これは、たとえば、オーストラリアの原住民のアボリジニの話を読んでも、森の現象などの自然現象が、なぜそうなっているのかを説明する話になるわけです。天体に関しても、多いようです。なぜそうなっているのか。お月さまもそうです。月面を見ますと、日本では、うさ

ぎが餅をついているといえます。現状の由来を話すお話が多いです。「七つ星」も、最後のところがそうになっていました。

それにしても、とともしんみりしてしまう話でした。若い男が、親に対して非常に優しい心を持っていて、しかし貧しくて、それ故に結婚する相手がいない。そこに、星が同情してお嫁に来てくれた。僕は、ここらあたりに、ものすごく、これを語ってきた人たちの優しい気持ちが込められていると思います。どうも昔話というのは、相手に対しての優しい気持ちがベースに流れているように、思っています。このお話もそのひとつです。その相手が星であるということで、非常にきれいなお話になっています。

昔話の語り口の方からいうと、星が降りてきて、娘になって、人間と普通に話しています。というのは、いわゆる二次元性です。昔話では、魔法をかけられている王女様と、普通の人間との間に、次元の違いがなく、普通にやり取りができます。それがここにも表れています。天体に対してもやはり二次元性が働いているということがよくわかります。

優しくて、わりといい話でしたが、最後には別れていきます。子どもは連れていきますが、亭主とは別れています。別れておわるところは、羽衣のお話からもわかりますし、竹取物語もそうです。竹取物語は、中国の小説の輸入ですが、天と人間の世界は、最終的には一緒になれずに、どうしても離れる話になってしまいます。その意味では悲しいお話になるのです。先ほどのお話の場合は、由来の話なので、小さい星がくっついているという由来を説明するために、子どもを連れ戻しています。羽衣のお話だとそうはいかないので、子どもを置いていってしまいます。このお話の場合は、幸いなことに子どもを連れていって来ています。

もうひとつ、石垣島の「星砂の浜」というお話があります。出典は同じく『おきなわ八重山昔ばなし』（八重山昔ばなしセミナー再話作品集第二集 2003）です。皆さんは星砂をご存知でしょうか。石垣島などに行きますと、白い浜で、砂を手にとってみると、星の形をしていて、白

いです。不思議な砂です。そのお話を、聞いてみてください。

・・・(朗読)・・・

今のお話には、いろいろな要素が入っています。ひとつには、沖縄の話では、海の神と陸の神、海の神と風の神などの対立の話が多いということです。戦うのです。このお話もそうです。海の神が、星が浜でお産をしたということで怒っています。こういう構成のお話が、石垣島をはじめとした沖縄の話には多い。天の神様は星に対して、「子どもを産むならば、あのきれいな浜へ行け」と言いましたが、それに対して海の神様は怒るという、対立になっています。最後の方では、「星の子どもはびかびか光っているので、すぐにみつきり、逃げるができなかった」とありますが、このところも、光景がはっきりしています。星砂を現地でご覧になった方はおわかりになるでしょうが、ひとつひとつが磨かれているかというぐらいきれいです。そういう光景が非常によく語られていると思います。

「大蛇は、一人残さずとって食べてしまいました」とあります。大蛇は星の子どもを全部とって食べてしまいました。この「全部食べてしまった」というところが、また、昔話の語りの法則にかなっています。昔話は、完全が好きなのです。食べてしまうとしたら全部です。何人か残ることはありません。もし残ったら、それが非常に意味を持ってくるわけで、ふつうは、完全に全部食べてしまいます。

「ところが、星の子どもの骨は、粉々になってもまっ白で、一つ残らず美しい星のかたちをしていました」とありますが、非常によく自然を観察しています。「このままではかわいそうだ。いつかお母さん星のいる天にかえしてやろうとお考えになって、この星の子どもの骨を自分のそばに集めておきました。東美崎あいましやしの神様にお仕

えする神かんつかさ司たちも、神様のみこころを知って、神様の香炉には、星のかたちをした、あの星砂を入れかえました」。結局子どもは、母親のとこ

ろに戻ったということで終わります。「今では、お母さん星のまわりに大勢の子ども星が集まって、夜空にぴかりぴかりと美しい光をはなつようになったということです」。これも最初に話したとおり、自然現象がどうなっているのか、どうしてそうなったのかという由来を説明する話で終わっています。一度、星砂のきれいなものをご覧になってください。そうすると、石垣島の人たちが、非常にきれいな自然からイメージしてお話を語っていることがよくわかると思います。

その他、沖縄には、母親が星になってしまった「ぱいが星ぶしう」という悲しいお話があります。

それから、星が5つ並んでいるのを見て、それを真似して、4本柱の真ん中に1本柱を立てて小屋を作ったという話もあります。これは長い話でちょっと複雑なので、今日はお話するのをやめておきます。

星に関しては、今お話したものは石垣島という日本で一番南の場所で、そこは星が猛烈にきれに見える場所で、いかにもそこらしいと思います。日本本土の方では、星が一番よく出てくるのは、「天道さま金の鎖」というタイプのお話で、「おにんばの話」(『天道さま金のくさり』金沢昔ばなし研究会再話作品集①所収 金沢昔話研究会実行委員会 2002)という話が知られています。つまり、やまんばに追われて、木の上で「天道さま、金の鎖をおろしてくれ」と言うと、天は鎖を降ろしてくれた、それに伝わって天に上がって行って、星になったというお話です。本土では、「星になった」というお話が多いです。たいてい、子どもが二人いて、やまんばに追われます。そして天から鎖が降りてきて、それにつかまって天に昇ります。二人いるので、星と月になります。ほかに、「お月お星」というお話がありますが、いずれも、ひとが天上界に行って星になるというパターンです。

・・・(朗読)・・・

ふつうは月と星になるのですが、今のお話では、太郎と次郎は二人ともお月さまになりました。そういう例もたくさんあります。今の

お話を聞いて、あれっと思ったと思います。前半がグリム童話の「おおかみと七ひきの子やぎ」とほとんど同じです。日本では、この話を「天道さま金の鎖」とよんでいます。やまんばに追われた子どもが、最後のところで「天道さま、金の鎖をおろしてくれ」と叫ぶので、そういう題が付いています。

日本の星のことをお話してきましたが、星の昔話といたら誰でもすぐに思い出すのは、グリム童話の「星の銀貨」(『語るためのグリム童話7 星の銀貨』所収 小峰書店 2007)だと思っています。グリム童話は、200話あるのですが、「星の銀貨」は153番に入っています。わりと短く、とてもきれいなお話です。国際子ども図書館の星野さんに語っていただきます。テキストなしで語ってくださいますので、いわゆるストーリーテリングです。

・・・(語り)・・・

この「星の銀貨」は、グリム童話ではとても有名なお話です。聞いていただいてすぐにお気づきになったかと思いますが、星が降ってきて、それが銀貨に変わっています。今まで紹介した日本のお話と相当違います。実は、ヨーロッパの中でも、昔話としては、このタイプはあまりありません。この話は、グリムが小説から取ったもののようです。ジャン・パウルという小説家の長い小説の中から、アルニムという人が一部を取って短いお話にして、それからグリムが取ったようです。ところで、『白雪姫はなぐられて生き返った:グリム童話初版と第二版の比較』(小澤昔ばなし研究所 2007)という本で、グリム童話の初版と第二版を比べています。僕の研究所(小澤昔ばなし研究所)で出版したものです。初版と第二版を上下に分けて書いてあります。それぞれの話の終わりに解説が書かれています。著者の間宮史子さんは、グリム童話の専門家で、グリム童話のテキストの変化について、非常に詳しい方です。「星の銀貨」については、次のように解説を書いています。

本から採用された話です。ジャン・パウル  
の小説『見えないロジ』(一七九三)から

採られ、アヒム・フォン・アルニムの短編小説『親切な三姉妹と幸せな染め物師』(一八一二)によって補足されたということがわかっています。

グリム兄弟は、この話の注釈に「おぼろげな記憶によって記録したので、補足し訂正してもらいたい」と書いています。これはおそらく、彼らが子ども時代にシュタイナウで、医者  
の妻ゴットシャルク夫人からこの話を聞いたことを意味しているようです。その話がしかし、ジャン・パウル  
の小説の影響を受けていた可能性が高いということも推測されています。

(『白雪姫はなぐられて生き返った:グリム童話初版と第二版の比較』P.391 間宮史子著 小澤俊夫、間宮史子訳 小澤昔ばなし研究所 2007)

つまり、このお話は小説から取ったものなのです。意外に思われるかもしれませんが、グリム童話200話のうち、約40話はいろいろな本から取っています。もちろん小説だけとは限りません。つまりグリム童話の200話中2割は本から採ったものです。その中でも特に、ジャン・パウルとかユング・シュティリングという、当時とても人気があった小説家の一部を採ったものがいくつかあるのです。ですから、「星の銀貨」は、非常にきれいです。おそらく昔話の場面にしてはきれいすぎます。こうやって並べてみるととても文学的です。何が違うかという、日本の話や他の外国の話は、死んで星になったという結末が圧倒的に多いのですが、「星の銀貨」は、星が落ちてきて、しかもそれが銀貨になるところが非常に創作的な雰囲気を持っています。このお話はきれいな話なので人気があります。このことは、とても面白いもので、昔話の中で、たとえば、グリム童話の中で特に有名な話は、たいてい文学的なものになっています。「ヘンゼルとグレーテル」「白雪姫」「ラプンツェル」などです。「ラプンツェル」は、グリムの100年前の小説から取っています。そういうものが、グリム童話の中でわりと有名だという

ことは、注目すべきところでは、

話が少しそれますが、グリム童話について、ドイツ農民の伝えてきた昔話だと言いますが、とてもそのようなものではありません。だいぶ違います。しかしそれは別として、この「星の銀貨」は、非常によくできているお話です。昔話の作り方からしても、主人公は女の子が一人で、「孤立性」があります。昔話では、この「孤立性」が非常に大事です。主人公が一人であることが圧倒的に多いです。ですから、話を聞いている方の注目がそこに集中します。そして、女の子の着物がだんだんなくなってしまって、最後には肌着までなくなってしまいます。つまり、先ほど言いました「完全性」です。そこまでいったときに、ポンと変化が起きます。星が銀貨に変わります。このように、昔話の作り方という点では、とてもよくできています。

### 月の昔ばなし―「月夜の金貨」「かしき長者」「こびとの贈り物」

星の話に続いて、お月さまのお話にいきましょう。これまででは、日本とドイツのお話を取り上げましたが、今度は中国のお話をひとつ聞いていただきます。中国のお話で月が登場する「月夜の金貨」『あつたとき』（第一期東京昔ばなし大学再話コース演習記録所収 昔ばなし研究所 2002）というとても面白いお話があります。先ほどのお話は銀貨でしたが、今度は金貨です。これも、昔ばなし大学の東京の再話コースの人たちが再話したものです。聞いてください。

・・・(朗読)・・・

これは、話の内容としては、グリム童話の「漁師とおかみさん」と似ています。欲望がだんだんと膨らんで、極限まで膨らんでいったときに、大転換して元に戻ってしまうというものです。話の内容はそういうことですが、これが面白いのは、月が照っている間だけ金貨は有効だということです。月が落ちてしまうと、ぱっと全部消えてしまいます。上手くかみ合わせています。とても面白いです。最後のところで、「みんながやっとの思いで山についたとたん、まあい月がぼんと西の山に落ちてしまいました。すると、

ちゃりんちゃりんと言がして、山の金貨はみるみる消えうせ、あとには枯れ草がなみうつばかりでした」。このところは、月がなくなると効果がなくなったという場面です。

後でご紹介する太陽もそうですが、月や太陽が、ある効力を持っている。月が照っている間だけ、太陽が輝いている間だけ有効で、それが消えると、一緒に効力もなくなるという扱い方で、これは時々みられる使い方です。太陽や月の効力の問題です。その時はいつも、満月です。今日お話ししている天体の中でいうと、星はいつも輝いていますが、月は、満ちたり欠けたりしますし、太陽は、東から昇って、西へ沈みます。月と太陽に関しては、変化があります。満ちると欠けるの、昇ると沈むの、これがいろいろな意味をもってきます。月が満ちる時に生まれると命が長いとか、月が欠ける時に生まれると命が短いといったように、人間の命と、月の満ち引きを結びつける考え方があるという指摘が、展示会の説明にもありましたが、まさにそうです。満月は、常に強い力を持っています。私たちが自然に向かって思う気持ちが、非常によく表れていると思います。月の効力が生きていることの、違う表現として、愛知の話で「かしき長者」(『とんとむかし』浜松昔ばなし大学再話作品集所収 昔ばなし研究所 2002)があります。これも、昔ばなし大学の再話コースでやったものです。やはりこれも、月が照っている間だけ効力があるという話です。

・・・(朗読)・・・

月の光が照っている時に、海原が砂浜に変わっていくわけですね。月の効力は、あちこちの話に出てきます。もうひとつ、月の効力が出てくる話には、グリム童話の「こびとの贈り物」(『星の銀貨』(小峰書店 2007 所収)があります。これは、日本の「こぶ取りじいさん」とほとんど同じ話ですが、月の効力が、終わりの方の、大事なところで出てきます。

・・・(朗読)・・・

聞いてほしいわかるように、明らかに「こぶ取り爺さん」ですね。ついでに話しておく、日本の場合は、「こぶ取り爺さん」、あるいは、

「花咲か爺」もそうですが、最初に出てくる爺さんは、いい爺さんで、後から出てくる爺さんは、悪い爺さんです。その悪い爺さんは、ほとんどの場合、隣の爺さんです。グリムの「こびとの贈り物」はそうではなくて、鍛冶屋と仕立て屋という、職業のちがいになっています。面白いことに、日本の「花咲か爺」のような話でも、日本の本土の北の端と南の端では、上の爺、下の爺となったりします。川上の爺、川下の爺、あるいは、金持ちと貧乏人となります。朝鮮半島にいくと、ほとんど、金持ちと貧乏人、または、兄と弟となります。中国でもそうです。日本の本土の中心部では、なぜかわかりませんが、常に隣の爺なのです。

今の話は、いわゆる、話型としては、日本の「こぶ取り爺さん」と同じで、いつかどこか何らかのルートで、日本に流れてきた話でしょう。最初に石炭をもらって帰るところがありましたが、「仕立て屋と鍛冶屋は、石炭がなんの役にたつかわかりませんでした、とにかくそのとおりになりました。それから、泊まるころをさがしに、先へ歩いていきました。谷間へ入っていったとき、近くの修道院の鐘が十二時を打ちました。そのとたん、歌声はやみ、すべて消えうせ、丘には月明かりだけが残っていました」。こここのところ、月明かりがぼっとでるので、とても面白い、いい場面だと思います。それまでは、いわゆる、魔法的な世界での出来事、日常の世界ではない超越的な出来事だったのが、十二時の鐘がぼーんと鳴った瞬間に終わります。普通の日常の世界に変わります。その時に、月明かりが、日常の世界に戻ったところを示しています。とても面白い、効果的な使い方をしていると思います。

昔話では、あちら側の世界と、こちら側の世界は、常に問題になります。たとえば、「ヘンゼルとグレーテル」を思い出してください。お菓子の家には魔女がいますが、あれは、あちら側の世界で、魔法的な世界です。超越的な世界と言ったりします。ヘンゼルとグレーテルが魔女を殺して帰ってくる時に、川があって、そこをカモの背中に乗って渡してもらい、お父さん

のいる世界に戻ります。あの時の、あの川が境界線です。魔女がいて、お菓子の家のあった世界と、お父さんのいる日常の世界との境目です。昔話では、あちら側の世界とこちら側の世界がとても大事で、そのときはたいてい、明確な線があります。線が引いてあるわけではありませんが、何かの区切りがあります。それが、今の話では、十二時の鐘、月明かりで示されています。非常に効果的に示していると思います。これも一種の月明かりの効果です。月明かりが、ある種の効力を持っているという考え方です。

### 太陽の昔話—「湖山長者」「アメノヒボコ伝説」など

効力という点では、太陽はもっと強い効力を持ちます。太陽は、神話学、あるいは文化人類学の方では、非常に問題にします。太陽は非常に強いので、覇権、いわゆる王権と結びつきます。つまり王権は太陽の光を背中に持って、後ろ盾にするという考え方があるので、神話学では太陽が非常に問題になります。

非常に強い力を持っているので、太陽を征服しようとする者が出てくるわけです。太陽を射る話が出てきます。あちこちの民族にある話です。台湾などにもあります。日本では、推仁天皇の時代に、9個の日輪が天にあった。9個の太陽があった。人は、驚き、騒ぎます。その時に、ある賢い人が、8個は偽のカラスで、ひとつだけが本当の太陽だと言います。弓の名人が8人、高い蔵を建てて登っていき、太陽に対して矢を射ります。それが、はしごのはじまりだと言われたりするのです。8羽のカラスを射落とすと、一つだけ太陽が残り、みんな安心するという話です。これは埼玉県入間郡で伝えられている古い話です。熊本や岡山、奈良にもあるといわれています。

そんな太陽の強い力が、いろいろな形で表れます。ひとつは「日招き長者」という有名な話があります。これは、「湖山長者」とも呼びます。これは、鳥取の話で、今でも、鳥取市内には湖山池という大きな池があります。実際に僕も見てきましたが、今はもう町の真ん中になってし

まっています。本来、伝説なのですが、とてもポピュラーなので、日本では、あちこちで昔話として伝えられています。

むかし、鳥取県に湖山長者といわれる大金持ちがいた。このあたりの田んぼは、見渡すかぎり、みな長者のものだった。田植えのときにも、刈り入れのときでも、村中の人を動員してやったそうです。ある年、もうちょっとで田植えが終わるという時になって、お日さまが西に沈みそうになった。長者は、これを見て、屋敷の一番高いところにのぼって、扇で「おてんとうさま、もどれ、もどれ、もどれ」とさしまねいた。すると、今にも沈みそうなお日さまが、止まったというのです。そのおかげで、残りの田植えもみな終わり、村の衆は長者の力にびっくりした。けれども、翌朝、長者が昨日終わった田植えに満足してもう一回見ようと思って眺めたら、辺り一面、池になっていた。それで、没落したという話です。それが今は、湖山池という池になっているという伝説です。つまり、太陽は当然西に沈むわけですが、それを、人間がまねいた。つまり、「沈んではいかん」と言って、止めたわけです。逆らったことに対する天罰であるという話です。ですから、太陽の効力はものすごく強いのです。

日本では、太陽は女性です。天照大神は女性です。正統的な神話では、太陽は女性として表われます。ところが、民間信仰の方には、男性の太陽もいます。女性神だけではなく、男性神もあります。それは、古事記の中にも出てくる話で「アメノヒボコ伝説」といいます。アメノヒボコという人がいます。ある女の人が沼のほとりで昼寝をしていると、そこに太陽が、女性のほとに差します。ほとというのは、古い日本語で、女性器のことをいいます。女性器に日が当たって、その女が身ごもった。これは、とても古い、大事なモチーフです。太陽によって身ごもった女。そして女は、珠を産みます。アメノヒボコという、国王の子が、この珠を手に入れるのですが、その珠が、美しい女に変わります。そして、その女と結婚します。これは、朝鮮半島での出来事ですが、その女が、日本に逃

げてくるのです。アメノヒボコはこの女を追って日本に渡ってきた。日本では、出石人（いずしじん）の先祖になったというのです。九州の方の伝説です。

太陽の効果は、先ほどの月でも少しその効果をお話しましたが、それよりも、太陽の方が圧倒的に強いのです。子どもを産ませることができている力を持っている。その子どもには、母親しかないわけですから、その子どもの物語になっていくと、たいていは、<sup>てて</sup>父なし子といって、いじめられます。そして、父親を探しに出かけていくという冒険の話になっていきます。父がないのでいじめられる。結局は太陽の子だとわかって、たいていは、王者になったりします。覇権を握っていくようになります。

太陽の光で妊娠するという話は、南の方に多いです。日本でいうと、奄美や宮古島に多いです。喜界島の話のひとつをご紹介します。昔、女が機織りをしていたら、太陽に愛されて男の子が産まれた。この愛されてというのは、日光に照らされたということです。この子が7歳の時、友だちから、父なし子と笑われ、母に父のことを尋ねたところ、父は太陽であると教わった。子どもは、白神酒を門に置き、火を焚いて、煙を立てて、自分を殺そうと思ったら、藁の綱、生かそうと思ったら、鉄の綱を下ろしてくださいと、天に願った。ある仕掛けをして、天に煙を上へ上げるわけです。そして、天に向かって、私に鎖を下ろしてくださいと願ったのです。すると、天から鉄の綱が下がってきたので、それにすがって天に昇った。この場面は、「天道さま金の鎖」と、とても似ています。天道さんからの鎖は、おそらくこういうモチーフが入っているのだと思います。天では、人間の子が上がってきたというので、番兵が子どもを川に投げ込んだけれども、子どもは向こう岸にすくっと立ってしまって死にません。馬に踏みつぶさせようとしても、馬は鼻で息を吸うだけで、やはり子どもは死にません。そこで太陽は、これは自分の子であると認めた。つまり、すごく強く、優れた子であるから、自分の子であると認めた

わけです。子どもは、自分は天にいたいと言ったけれども、太陽は子どもに帳簿をあげるから、これを見て、病気を治したり、麦の供物、米の供物をもらうようにせよと言って、子どもを地上に下ろします。子どもは、もらった7冊の帳簿を持って地上に帰ってきた。子どもは、その帳簿を両脇に挟んでくるのですが、途中で2冊落としてしまったけれど、地上に戻ってきた。そして、始祖になったという話です。南の方にとっても多い話型です。太陽の場合は、月や星と少し違います。常に、王権や一族の始祖（一番初めの祖先）の伝説と結びつくことが多いようです。

### おわりに

最初にお話したように、昔話の中で、天体がどう語られているかという観点からすると、神話学とは違う見方ができます。神話学では、これがなぜそのようにいわれているかといういわれをたぐっていくのですが、昔話の中で、天体がどう語られているかというのは、一番の注目は、僕たちを取り巻いている星、月、太陽は、毎日僕らと付き合っている点です。そういうときに、こちらの気持ちが反映します。同じ星を見ても、悲しい時とうれしい時とは違います。その気持ちの交流が、昔話の中では、微妙に表されていると思います。そして、先ほどの月明かりのように、大事なところで、ぼんと出てきて、それが境目になったりします。大変、微妙な使い方です。それに対して「星の銀貨」は、いわゆる小説から入ったものなので、少し雰囲気が違うということが、おわかりいただけたと思います。ということで、昔話の中での天体という話を、このへんで終わらせていただきます。

### 質疑応答

Q アイヌの方に「クナウとひばり」というお話があります。あれは、星、月、太陽とは少し違いますが、<sup>なかぞら</sup>中空というのが出てきますが…。

A 今日は、星、月、太陽と集中したので、天一般をやりませんでした。天というのは、いろいろな国に話が出てきます。それには、いつも天には床があるのです。それが一番基本です。本当を言えば、天というのは、ただ天空です。でも、必ず床があるのです。そこへのぼれるのです。中空でぶらぶらしません。日本の「天人女房」でも、わらじを千足積み上げてのぼっていき、最後に女房に手を引き揚げられて、ぼんと天の上へのぼります。まるでここに床があるみたいに。アイヌの場合もそうです。天に、ふつうに国があるのです。家があって、道があって、ということは、この地上と同じ世界を天に創っているのです。気をつけて見てみると、必ずそうになっています。ただ漠然と空へ行って、空中遊泳している状況にはなりません。ついでに言いますと、地下もそうです。たとえば、グリムの「ホレばあさん」をご存知でしょうか。継子が、井戸のほとりで、糸紡ぎをしていて、糸車を落としてしまいます。継母に叱られて、取って来いと言われ、井戸に飛び込むと、沈んでいって、下までいくと、土地があって、草原があって、歩いていくと、パン焼窯があつたり、リンゴがあつたり、しまいにはホレばあさんの家があります。地上と同じものが地下に想定されています。それと同じで、空も、空の上へのぼっていくと、床があって、そこに家があって、道があって、森があつてとなります。とても面白いです。ほとんどどこでもそうです。もっとそれがはっきりしているのが、雲です。昔ばなしでは、雲の上を歩くことができます。よくあるのは、雲の上にあがって行って、雷さんのお弟子さんになって、雷さんの後について水をまいて歩いたという話。雲もまるで床のように堅いものとして感じられる。ほとんどそうです。

Q 「お日さまとお月さま」の話ですが、月日が経つのが早いものという小話がありま



すが、あれは、昔話ですか。

A はい、昔話です。よくご存知ですね。ちょっと語ってくれないですか。語っていらっしゃるのでしょうか。どうぞマイクを使って。

Q むかし、お日さんとお月さまと雷さまが旅に出ました。ある宿につきまして、その夜は宴会となりまして、お月さまとお日さまと雷さまは、飲んだり食ったりしてすごしました。次の朝、雷さまが目をさますと、もうお日さまもお月さまもいませんでした。そこで、宿屋のものを呼んでたずねますと、「お日さまもお月さまも、もうお発ちになりました」と言われた雷さまは、「は一、月日が経つのは早いものだ」と言いました。そして、宿屋のものに「雷さまは、いつお発ちになりますか」とたずねられますと、「わしか、わしは夕立じゃ」と答えました。

A ありがとうございます。今の話で、月と日が、なぜ早く出てしまったかというのと、雷が一晩中いびきをかいて、ゴロゴロとうるさくて、こんな奴と一緒に旅してられないと、朝早くに出てしまったわけです。これは、一口話なので、いわゆる、日と月と雷の特性を使っているだけで、今までのとは、少し性質が違います。笑い話になると、使い方が違います。

Q 「湖山長者」の話で、太陽をさし戻したということでしたが、たとえば、平清盛が音戸の瀬戸を開削する時に、一日で工事を完了させるため太陽を戻したので、その崇りで…、という話がありますが、あれもだいたい同じような話ですか。

A 同じです。それも、太陽の運行、太陽が動いていくのを使っています。先ほどお話しした、月の満ち干と、太陽の昇り沈みというのは、つねに問題になります。ひとつ補足ですが、「グリム童話」の中の「七

羽のからす」で、お兄さんを救うために、妹が旅に出ます。お日さまのところに行ったら、熱すぎて…。そこのところだけ、読んでみます。ここは、太陽・月・星がとても擬人化されている出方です。

・・・両親からもらった指輪と、おなかですいたときに食べるパンひとつと、のどがかわいたときに飲む水と、つかれたときにすわる小さいすだけでした。

女の子はどんどん歩いていきました。どこまでも、どこまでも歩いて、世界の果てまで来ました。そこで、お日さまのところへ行きましたが、お日さまは熱くておそろしくて、小さな子どもたちを食べていました。女の子はいそいでそこからたちさり、お月さまのところへ行きました。けれども、お月さまは冷たくてこわくて、いじわるでした。そして、女の子に気がつくと、

「人間の肉のにおいがするぞ。人間の肉のにおいがするぞ」といいました。

女の子はいそいでそこからたちさり、こんどはお星さまのところに来ました。お星さまは、みんな親切でやさしくて、それぞれ、ひとりずつのいすに腰かけて

いました。あけの<sup>みょうじょう</sup>明星が立ちあがって、

女の子に、ひよこの足をくれて、

「この足を持っていないと、あなたのお兄さんたちがいるガラス山をあけることはできませんよ」といいました。

(『語るためのグリム童話2 灰かぶり』所収 小峰書店 2007)

とても擬人化されて、登場人物化しています。太陽が熱く、月が冷たく、星がやわらかいという性質。これもやはり普段見ている感じがあるのでしょうか。見ている人の感情の反映だと思います。もうひとつ、月で思い出したのですが、月の中に、日本で

は、うさぎが餅をついていると言います。誰でも疑わずにそう言っていますが、あれは元来、中国からきた考え方だそうです。面白いことに、ヨーロッパでは、子どもが叱られて閉じ込められているという説が多いです。ぜんぜん見方が違います。ドイツ人が、「よく見てごらん、子どもがいるじゃないか」と言いますが、僕たちは、どう見てもうさぎだと思います。

Q 日本人が見る天体観とヨーロッパ人が見る天体観で、違う部分がありましたら、どのように違うのかを教えてください。

A それは、返事がとても難しいです。つまり、圧倒的に同じ部分があるのです。たとえば、今の、太陽は熱いというのは同じですし、月が、なんとなく冷たい感じに思えるのは、日本人もそうだと思います。星は、やわらかい感じがあって、そういうところは同じです。けれど、月の中に何がいるかは違ってきますし、同じか違うかと言われると、困ります。同じ部分と違う部分があります。ひとつの例でいえば、太陽を描くのに、日本人の子は、赤く描きますが、ドイツの子は、黄色く描きます。これは、受け取り方の問題なので、説明のしようがありません。そのことは、たぶん、にわたりの鳴声と似ていると思います。日本人には、どう聞いたって「コケッコー」と聞こえるでしょう。ドイツ人は「キケルキー」と言います。英語の人たちは「クッカドゥウルドゥー」と言います。そういう違いは、比べようがないのです。ですから、天体だけではなく、文化一般について言えると思いますが、人間なので、ヨーロッパ人であろうが、アフリカ人であろうが、同じように感じる部分と、全く違う部分が同居しています。ですから、異民族間の理解というのは、難しいのだと思います。

Q といったところで、ヨーロッパと日本で、

かなり同じ部分もあると思いますが、しいて、日本の昔話の中で、天体に関しての特徴的なところが、何かお気づきでしたら、お願いします。

A 僕も今回やってみて、日本だけの特徴が何かあるかと思いましたが、ほとんど言えません。死んだら星になるというのも、いろいろな民族にあります。ですから、死んで月になった、星になったというのは、わりと考えやすいです。ほとんど違いがありません。それから、太陽は、常に権力者で、強いところも同じです。ですから、これが日本ですというのは、言いにくいです。もうひとついいでしょうか。「太陽の東月の西」というノルウェーの昔話があります。ヨーロッパでは、大変有名な話で、「美女と野獣」と同じタイプです。これは、太陽の東、月の西というので、まさに天体を扱っている話だと思いますが、実は全然そうではありません。太陽の東、月の西の間にあるお城に住んでいる魔女の話というだけです。太陽のことも、月のことも出てきません。そこで、太陽の東、月の西とはどこだろうと考えてみたのですが、わかりません。どこにもない国という意味だと思います。地理的によく考えてみても、わかりませんね。どうぞ暇な時に考えてみてください。これは、とてもいい小説なのでお勧めです。岩波少年文庫に入っているのですが、長いこと品切れで、やっと2年くらい前に復刊されましたので、今のうちに買っておいた方がいいですよ。またなくなったら、当分手に入らないかと思っています。